みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

# Folkways of Food and Clothing Encountered in the Fieldwork of Anthropology



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2016-03-08<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 韓, 敏<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | http://hdl.handle.net/10502/00005873 |

◉論説

# 人類学のフィールドワークで出会った「衣・食」民俗

韓　敏

## はじめに

民俗は一般に民間に伝わる古い信仰・風俗・習慣のことと考えられている。また、それは地域・時代・民族によってそれぞれ特徴を持つとされる。

中国において今でも伝えられている古いことわざがいうように、「五里不同風、十里不同俗」――民俗は、五里ごと[1]、十里ごとに異なる。中国人は早くから地域による民俗の違いに気づき、民俗という言葉は古くから文献の中に登場してきた。たとえば『礼記・緇衣』の中には、「故君民者章好以示民俗」（故に人民を治めるものは、自分の好むところを明らかにして、人民に生活上の規範を示す）という記述がある。また『韓非子・解老』の中には、「獄訟繁則田荒、田荒則府倉虚、府倉虚則国貧、国貧則民俗淫侈」（訴訟や裁判が多ければ、田畑が荒れ、田畑が荒れれば、生産が少なくて国の貯蔵が尽き、そうなれば国は貧しく、人民の風俗習慣が軽薄となる）という記述がある。前者の〝民俗〟は、生活上の規範を表す意味であり、今日の〝民俗〟と少しニュアンスが違う。後者は、民間の習俗としての意味合いをすでに持っているといえる。

日本においても、民俗は中国語と同じく民間の習俗という意味合いで古くから使われてきた。中国語と日本語の民俗に当たる英語は folk custom あるいは folk-ways である。

民俗学は、独立した学問として前世紀に初めてイギリスに誕生した。一八四六年、後にイギリス民俗学協会の創始

者の一人となったW. J. Thomsがfolk（特定の人々）とlore（学問、知識、伝説、伝承）を組み合わせ、Folklore（the Lore of the People）という表現を使って、それまでに流行していたpopular antiquitiesに取って変え、民俗学を表わした。一八七八年、ロンドンに世界で初めての民俗を研究する機関、「民俗学協会」（Folklore Society）が発足し、会誌『フォークロアレコード』が刊行された。

日本の民俗学は、ヨーロッパ民俗学の影響を受けながら、二〇世紀初頭に柳田国男によって創始された。そこで民俗は、衣食住、生産方式・技術、儀礼および遊戯などの有形文化、ことわざ、歌謡、伝説などの口頭伝承を含む言語芸術、民間の好みや信仰などを含む心意表現、といった三つの部門に分類され、研究されてきた。[2]

中国においては、フランスに留学した楊堃博士が一九世紀イタリアとフランスで使われていた民俗学の表現であったtraditionismを中国語に訳して「成訓主義」あるいは「民間成訓」とした。後にイギリス流の民俗学が主流となるにつれ、「民俗学」という表現が定着した。[3]この民俗学の用語は日本語の訳語から借用したものである。中国における民俗学の発端は一九二〇年代、北京大学の歌謡研究会（一九二〇年）、風俗研究会（一九二三年）、方言研究会（一九二四年）の成立および『歌謡週刊』の発刊（一九二二年）に遡る。[4]後に一九二七年一一月、広東省にある中山大学で中国で初めての「民俗学会」が設立され、以来、口頭伝承、庶民の生活と文化を中心に研究が進められてきた。

前述したように、民俗学は、国によって研究の重点が多少異なるが、その共通点は、それぞれの民族ごとに、古い習慣、行事、信仰、民謡、ことわざなどを研究することによって、自民族の日常生活文化の歴史を再構成しようとする点である。

文化人類学（以下、人類学）[5]は、人間についての総合的研究である。つまり、フィールドワーク[6]を通して、世界の民族と文化・社会を比較し、人類の文化・社会の機能・構造や進化・歴史、その共通性と多様性を明らかにする学問である。人類学は、これまで、個別民族の民俗をまったく無視してきたわけではないが、民俗を直接研究の対象とはしなかった。民俗学が、広範な社会コンテキストから抽象した口頭伝承、庶民の日常生活と年中行事などの伝統的テキストと実践を研究の目的とし、自民族の日常生活史を再構成しようとするのと違って、「人類学は逆に全体的にいえば、文化と社会構造を説明する根拠を見つけるために、民俗を研究していた」。[7]

人類学者はフィールドワークを行なう時に、避けようと思っても必ずいつかどこかで民俗と遭遇するのである。人類学を研究する人間として、民俗は自分の研究にとってどのような意味合いを持つのか？　これまでの人類学のよう

に、民俗を、ただ文化と社会構造を説明するための根拠として利用するだけでよいのであろうか？　どのように扱ったらよいのであろうか？　私は、人類学のフィールドワークを始める前にこの問題についてあまり深く考えたことはなかった。一九八九年一〇月から九一年四月まで、東北地域の漢民族出身である私は、南に約一五〇〇キロ離れた安徽省北部の同じ漢民族居住地域で、フィールドワークを集中的に行なった時、いろいろと地元の民俗と出会った。本論文では、フィールドワークで出会った「衣・食」民俗のあり方を検討し、人類学にとっての民俗の意味を考えてみたい。

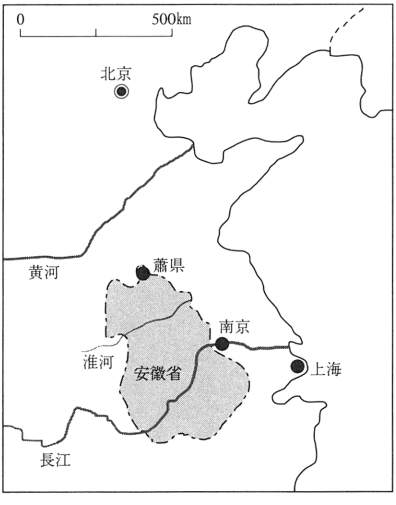
## 一　安徽省北部の冬の靴——毛窩子（マオウオズ）

安徽省北部は、淮河より北の平原地域を指して、宿県地区、阜陽地区の南部、淮北市と蚌埠市を含む（図1）。地元では、安徽省北部というより、淮北、あるいは淮北平原と呼んでいる。ここは、紀元前一三二年に黄河が南下して氾濫したことによって、平原と、少しの丘陵と台地の地形が形成された。黄河氾濫によってもたらされた黄土高原の物質は、アルカリ分を多く含むため、ここをアルカリの土壌にしてしまった。

安徽省北部の宿県地区で二ヵ月ほどの予備調査を終えて、私は九〇年一月から、宿県地区蕭県馬井区にある知人の実家の村で本格的な住み込み調査を始めた。そのほか、宿県地区の宿県三八郷と蚌埠市の固鎮県湖溝鎮において短期調査を行なった。

調査の狙いは、長い歴史の中で形成されてきた農民社会の社会組織と文化が、社会主義近代国家の成立の過程において、如何に変化したのかを究明することにあった。そのため、六百年にわたって地域化された李氏一族を対象とし、家族構造、宗族[8]、姻戚関係及び冠婚葬祭などの儀礼に焦点を絞って考察を行なった。

調査地の蕭県は北緯三三度五六分から三四度二九分の間に位置する。ここは紀元前二一世紀には、すでに蕭国とな



っており、春秋時代に入ると、蕭国が滅び、宋に従属するようになった。秦代に蕭県が設けられ、以来、唐、宋、元、明、清代を通して、ずっと徐州に帰属してきた。一九五五年、蕭県は江蘇省の徐州から、安徽省の宿県地区に帰属を変え、その後、一九八五年現在まで、蕭県は三つの鎮と十の区、七四の郷を擁している。人口は九八・八万人で、そのうち農業人口は九五・一％を占めるが、[9] 人口の構成のみならず農工業の総生産高から見ても、蕭県は農業県といえる。

滞在した李家楼（仮称）村は蕭県の県城より西北に約四〇キロ離れたところにある。一九九一年四月現在、村の人口は三〇一人で、七八世帯ある。この地域の多くの村と同じように、同村は同じ父系血縁集団からなる単一宗族村[10]である。すなわち、ほぼ村人全員が共通祖先からの父系出自の子孫である。一四世紀明朝の初期、皇帝朱元璋の勅命によって、李一族の先祖が山西省の洪洞県から江蘇省の銅山県に移り、その後約三百年前に、一部の李姓が現在の所に移住してきた。ここは黄河下流に位置し、しかも、南北を貫く交通の要地であるため、歴史上自然災難や戦争が頻発していた。このような不安定な状況がこの地域の貧困と宗族の結束を特徴づけていた。現在、李姓の父系血縁集団は五つのセグメントに分けられている。系譜上の関係は非常にはっきりしていて、今でも明朝からの族譜をもっている。

李家楼村一帯の生業は、小麦、大豆、サツマイモ及び綿花を中心とする輪作農業である。そのうち、綿花と小麦の質が特に良いとされている。蕭県は政府に「優質綿花輸出県」と「小麦の優秀な商品糧生産基地」として指名されている。そのほかに李家楼村では梨、葡萄、桃も栽培している。春になると、青空の下の広々とした麦畑は、濃い緑の絨毯のように地平線まで伸びていく。そして黄色の菜の花や白い梨の花やピンク色の桃の花がカラフルな宝石のように緑の絨毯の中に散りばめられていて、通りかかる人々の心を魅了する。李家楼村は安徽省北部、淮北平原のイメージをもっともよく現わしている村落の一つといえる。

ここの冬の気温は、平均マイナス二度であり、東北の冬と違って、時には雨が降り、しかも多くの場合、長雨となる。寒くてじめじめとする上に、舗装していない田舎の道はどこへ行ってもひどくぬかるんで歩きにくい。もっていったスニーカーは、すぐ濡れてしまった。オンドルもストーブもない部屋は、外よりも寒かった。東北出身で、寒さに強いと思った私であったが、お手上げの状態だった。

このとき、ホストマザーが私に一足の「毛窩子（マオワオズ）」（写真1）を持ってきてくれた。それまで見たこともない妙な靴であった。

「毛窩子」の底は一枚の厚い木を彫ってできていた。足のつま先と踵にあたる部分は、低いものは一～二センチぐらい、高いものは五センチぐらいある。靴の甲の部分は麻

と葦の花か牛の毛で編んであり、一・五センチぐらいの厚さがある。ホストマザーはこう説明した。

「この毛窩子は、実に暖かいのよ。冬場がどんなに寒くても、どんなに雨が降っていても、これがあれば大丈夫」。

私は半信半疑で履いてみた。履いた最初の瞬間は、足が木の靴の中に在るような感じがして、硬くて重たかった。進もうと思ってもなかなかバランスをとりにくい。しかし濡れたスニーカーはまだ乾いていなかったため、仕方なく我慢して「毛窩子」を履きつづけた。二日目になると、やっと少しバランスよく歩けるようになった。数日後、私は村人と同じように「毛窩子」を履いて村のあちこちを自由に行き来できるようになった。慣れると、最初の硬くて重たい感覚がまったくなくなり、ただ暖かさだけが感じられた。

「毛窩子」の厚い靴底は、足をぬかるんだ地面から守り、また麻の糸でできた厚い靴の甲は足を寒さから守るのである。「毛窩子」は冬のブーツであり、雨の日の雨靴であるといえる。だから、冬の寒い日、雨の日になると、この地域の農村では、歩くようになった子供からお年寄りまで、男女問わずほとんどの人がこの靴を履くのである。

「毛窩子」を作るのは力の要る仕事なので、主に男がやる。父親になる男なら、誰でもできる。まずは、木を探してきて、のこぎりで木材を切り、斧あるいはなたで形を整え、かんなをかけて靴底を作る。どの木でもよいとされるが、よく使われるのは柳の木らしい。靴底ができたら、今度は靴底の縁辺りに穴をあけて、麻の糸を通して上に向かって葦の花か牛の毛を入れて編むのである。これらの材料で細かく編んだ靴の甲は、水と寒さに非常に強い。器用な男なら半日で出来上がる。どの村も「毛窩子」を作る名手がいて、彼らは当然村人から尊敬を受けている。

この「毛窩子」を履くのは蕭県だけではなく、安徽省北部、淮北平原全体に共通してみられ、それ以外の地域では見られない風習である。「毛窩子」を履く慣習はいつ頃から始まったのかは誰に聞いてもわからない。文献にも書かれていない。だが人々は自分たちの「毛窩子」を非常に自慢している。

同じ漢民族出身であっても、東北出身の私にとっては、「毛窩子」は非常に不思議な存在であった。私はこの不思議な出会いを淮北平原の民俗として受け取った。つま

写真1　「毛窩子」を履いた村人（1990年）

り、「毛窩子」を履く慣習は、今まで自分の暮らしてきた、あるいは行ったことのある他の漢民族地域では、見たことのないものであったからである。そしてふと気付いたのは、民俗が民俗として成り立つのは、他者と比較して独特だからであるということであった。お正月に爆竹を鳴らすのは漢民族の民俗だといえるのは、チベット族やモンゴル族と比べて、異なるからである。私の生まれ育った瀋陽も、お正月に爆竹の音が溢れている。しかし、だからといって爆竹を鳴らすのは瀋陽の民俗とは言えない。瀋陽にしかない慣習ではないからである。したがって、民俗とは、相対的なもので、他者があっての民俗であり、普遍性に対しての特殊性であり、一般性に対しての多様性であるといえよう。

「毛窩子」との出会いは、私と非調査対象との関係を目に見える形で教えてくれた。つまり、フィールドワーカーは非調査対象の中の一員であると当時に、また彼らにとって他者でなければならないという当たり前のことである。フィールドワーカーは時には調査対象者と一体化し、彼らと一緒に野良仕事をし、一緒に市場に行って取引をしたりするが、一方、時々部外者に戻り、彼らの喧嘩を野次馬のように冷淡に眺めたり、彼らから距離を置いて観察する必要もある。一体化がなければ、被調査対象の社会内部の仕組みや、彼らの行動を支配するものの考え方が理解できなくなる。また同じように、もし調査対象者とただ完全に一体化するだけで、他者である立場を忘れていたら、フィールドワーカーは非調査対象を相対化できなくなることになり、木が見えるが、森が見えなくなるということになる。

「毛窩子」との出会いが私に目に見える形で教えてくれたもう一つのことは、民俗は人間が自然環境に適応する結果であるという点である。冬が寒くて雪も雨も降り、沼地となりがちな淮北平原では、「毛窩子」が人々の足を寒さと水から守ってくれる。このことから私は、オランダの木の靴と日本の下駄を連想した。木の靴は、海抜が低く、沼地の多い国ならではの知恵であり、下駄も雨が多くて湿気の多い国ならではの知恵だと思った。もちろん、現在のオランダでは、道路が整備され、木の靴を履く人がたしかにいなくなってはいるが、木の靴は、オランダの象徴とされ観光の分野で活躍しつづけている。

一九九六年の夏、オランダの民俗村を見学したとき、木の靴を作る工房に出会った。職人が簡単な機械を頼りに一本のポプラの木から靴を作り、数十分で一足の靴が出来上がる。工房の隣は、木の靴の展示場と売り場となり、そこにはいろいろなサイズの木の靴と木の靴の形をした観光記念品があった。私は記念に、オランダを象徴する木の靴の形のペン立てを買った。観光客が楽しそうに自分の足のサイズにあう木の靴を履いていた。私もやってみた。履いた感触は「毛窩子」を履いた時と同じように硬くて、バラン

スをとりにくかった。コンクリートの地面を歩くのは少し無理かも知れないが、沼地ならと思った。木の靴は、その実用性がなくなっていても、オランダの民俗として、そして民族の誇りとして観光の土産品となって人々に記憶されている。また、日本の下駄も、日常の履物ではなくなっているが、伝統の象徴として、現在、礼装用の履物と変身している。

淮北の農村も、当然いつか道路が整備される日が訪れる。そのとき、人々は彼らの「毛窩子」をどう扱うのだろう？ふと李家楼の村人たちがよく私に言った話を思い出した。

「毛窩子は、日本では使えないけれども、われわれのところでしか作れない珍しいものだから、一足日本に持っていったらどう？」

民俗は、民衆の自然環境への適応の結晶であると同時に、また自分たちのアイデンティティを意識させるものでもあり、彼らの歴史やルーツを示すものでもあり、彼らの誇りでもある。実用性がなくなっても、民俗は歴史のシンボルとして、観光用の土産などのさまざまな形となって、民衆の間で生きつづけるだろう。

## 二　安徽省北部の麺類食品

安徽省北部は稲作地域ではないので、現在、人々の主食は主に小麦粉から作った麺類である。私の滞在した家は、他の農家と同じように一日の三食の主食が麺類食品である。朝食の食べ物は、大体「饅頭」とサツマイモで作ったお粥、自家製の味噌と野菜の炒め物である。ここの「饅頭」は日本の饅頭とは違って、中身には餡がない蒸しパンのことである。昼食の食べ物はうどんか「饅頭」、野菜の炒め物であり、夕食のメニューはまた「饅頭」、サツマイモ粥と野菜炒めである。米が主食である私にとって最初の半年は決して楽なものではなかった。

ところが日が経つにつれて、胃腸がだんだんと慣れてきて、麺類食品のおいしさもわかってきた。そして、米と違って、面類食品のメニューが実に豊富であることに気づいた。

村人は一日三食、小麦粉の「饅頭」を食べられることを非常にありがたく思っている。彼らは一九四九年の解放前までは、地主の家でさえ、家族全員が年中小麦粉の「饅頭」が食べられるとは限らなかったと語っている。貧しい農家の場合、高粱、サツマイモ、糠と野菜を混ぜて作った団子をよく食べていたそうである。解放後、農民の生活は少し改善されたが、今ほど裕福ではなかった。六〇年代、七〇年代にはこのような流行り歌が伝えられていた。「紅芋飯、紅芋饃、離開紅芋不能活」（サツマイモのご飯、サツマイモの饅頭、サツマイモがなければ、生きられない）[1]。八〇年代に入って、経済改革の実施によって、農民の生活が豊

かになり、今は年中小麦粉の「饅頭」が食べられるようになった。

実は、「饅頭」以外に、主食のメニューはほかにもいろいろある。よくあるのは、「花巻」「油餅」「葱油餅」「油酥餅」「厚饃」「烙饃」「鍋餅」などである。

「花巻」は変わり形の「饅頭」の一種である。その材料、発酵のさせかたと蒸し方は「饅頭」と同じであるが、くるくる巻いた形になっている点が異なる。巻き方の組み合わせ方によって多種多様の形のものが作られる（写真2）。

「油餅」は、小麦粉を少量の油でこねて塩と五香粉で味付けし軽く焼いたものである。柔らかくておいしい。ここの「餅」は、日本のオモチとはまったく別物で、小麦粉を捏ねたのを焼いたり、蒸したり、煮たり、油で揚げたりした食品の総称である。五香粉は中華料理の味付けに用いる五種類の香料、すなわち、山椒、ういきょう、八角、桂皮と丁香を粉にして混ぜ合わせたものである。

「葱油餅」は、「油餅」とほぼ同じ作り方で、さらにみじん切りの葱を入れる。小麦粉と葱の香りが混ざり絶妙な味が生まれる。

「油酥餅」は、小麦粉を大量の油でこねて焼いたパイで、ふわっとやわらかい。

「厚饃」は発酵した小麦粉をこねて、油など入れないで焼いたパイのことである。丸くて二センチほどの厚さがある。

写真2　小麦粉で作った正月の神への供え物。「饅頭」の後ろにあるのは棗のたくさん入った「花巻」（1991年）

これらの麺類食品の中で淮北の人がもっとも好んでいるのは、「烙饃」である。丸い形をして、直径はおよそ四〇センチぐらいあり、紙のように薄い。平鍋の上で焼く。ひっくり返しが一回で、一枚の「烙饃」は、数十秒でできあがる。できた「烙饃」は微かな小麦粉の甘味があって、柔らかくて弾力性もある。そのまま食べてもいいし、味噌をつけたり、炒めた野菜か卵を入れたりして巻いて食べてもいい。二枚の烙饃の間に野菜を入れ、ふちを綴じて焼いたものを「菜合子」という。また、胡麻を最初から小麦粉の中に入れてこねて作ったものを平鍋で硬く焼いたのを「干饃」という。「干饃」はばりばりと口当たりがよくて、しかも消化によいと言われている。解放前によく子供や病人のおやつとして使われたそうである。食べ残した「烙饃」は水で戻して、野菜といっしょに炒めると、またおいしい。[12]

「烙饃」を作るには少なくとも二人の共同作業が必要である。一人がその皮を作る。もう一人が平鍋の火加減を見ながら「烙饃」をひっくり返す（写真3）。田舎の子供は、学校に入る前に、男女を問わず、母親の「烙饃」作りの手伝いをする。八、九歳になると、「烙饃」を上手にひっくり返すことができるようになる。女の子なら、十二、十三歳になると、「烙饃」の皮を作ることができるようになる。淮北では、「烙饃」は一人前の主婦であるかどうかを判断する主要な条件の一つである。村に新しい嫁がくる場合、姑と近隣の人たちは、まず花嫁が「烙饃」を作れるかどうか、どれぐらいできるのかをみる。当然、「烙饃」が下手な嫁は、村中の笑いものとされる。「烙饃」は、特に客を接待するとき出す主食なので、上手にできないと一家の顔が立たない。

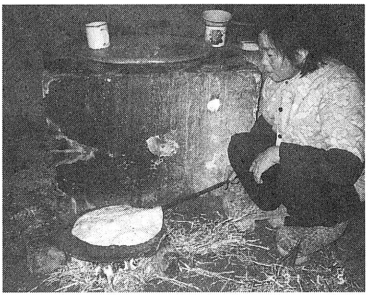


写真3　烙饃をひっくり返す主婦（1991年）

「面筋湯」も淮北における麺類食品の絶品の一つである。「生麩」（地元では面筋と呼ぶ）と千切りの昆布、炒めたピーナツ、卵と野菜で作ったスープである。小麦粉をこねて大きなかたまりにし、これを水の中でゆっくり揉み、澱粉質を洗い落としたあとに残ったねばり強いものが面筋である。昆布、野菜、卵、面筋、ピーナツを順にいれる。料理の名はスープであるが、実際はどろどろしたもので、一口食べると、すぐその絶妙な味と歯ざわりのとりこになりそうな感じである。

このように、淮北の小麦はいろいろな食べ物に変身して、味・形のバリエーションを作りだし、人々の食卓を飾り、人々の生活に潤いを与えている。

## 三　年中行事・冠婚葬祭・ことわざからみる麺類食品

淮北では、麺類食品は彼らの日常の食生活を支えているだけではなく、年中行事や人生の通過儀礼においても大きな役割を果たしている。

ここには旧暦のお正月が来る前に、「饅頭」を大量に作っておく習慣がある。いつもの小麦粉のほかに、とうもろこし、高粱、豌豆などの粉も用いる。淮北の年越しは旧暦の一月の一日から一五日までなので、「饅頭」もお正月の一日から一五日まで一家が食べる分を用意する。もし一人が一日「饅頭」を四個食べるとすれば、四人家族の場合、半月で二四〇個の「饅頭」が必要となる。来客の分を含めて三〇〇個ぐらいは用意する必要があるだろう。残った「饅

頭」は、当然硬くなって食べにくいが、蒸しなおすとまた柔らかくなって、おいしく食べられる。

淮北の人は、なぜこのような一見「不合理」にさえ見えることをやるのだろうか？

お正月の「饅頭」の数は、その一家の富、来る一年の運命を象徴するものとされ、数が多ければ多いほど、長く食べれば食べるほどいいとされている。この風習を守らない家は、「なんと暮らしの立て方がまずい家だろう。饅頭をほんの少ししか作っていないなんて」と、村人に笑われる。

「饅頭」は人間が食べるほか、神にも供える（写真2）。神様への供え物の印として、通常「饅頭」の表に五つの赤い点をつける。

旧暦の一月十五日は、上元節、または元宵節ともいって、漢民族の伝統的な年中行事である。言い伝えによると、この風習は東漢の永楽年間（紀元五八－七五年）に、明帝が仏教を提唱するために、上元の夜、宮廷や寺院の中で灯籠をかけて仏を表し、また、さらに官僚や庶民にも戸ごとに灯籠（紙で作った）をかけるよう命令したことから始められたそうである。[13] 今でも、漢民族の間では、戸ごとに各種の灯籠をかけて祝う習慣が残っている。

淮北では、元宵節を祝うには、紙で作った灯籠をかけるほかに、「面灯」を作る風習がある。「面灯」は小麦粉を蒸して作った灯籠のことである。円柱の形をした六センチあまりの高さのもので、上端は下端より幅がある。

「面灯」を作るのは、主婦たちの仕事である。当日の午後から、小麦粉をこねて「面灯」の形を作り、蒸籠にのせて蒸す。それから、綿花をよって高粱がらといっしょに灯心を作り、できた「面灯」の真中に指しこんで綿油を注ぎ、仕上げる。日が暮れると、子供たちはさっそく母親の作った「面灯」を手にして、外に出、仲間たちと会って、お互いに手作りの「面灯」を評価したり、爆竹を鳴らしたりする。

子供や男たちが外ではしゃいでいる間に、主婦たちは、台所やお金を入れる箪笥、穀物囲い（田舎で穀物を貯蔵するために蓆で囲ったもの）、家畜小屋、ベッドの下、壁の隅などの場所にそれぞれ一個の「面灯」を置く。こうして家の外はもちろんのこと、家のなかも一遍に明るくなる。こうすることによって、邪気を払い毒虫を防ぐという効果があるとされる。

これらの行事のあと夕食が始まる。町の住民なら、店から「元宵」（胡麻・くるみ・さんざしなどの餡入り団子）を買ってきて食べるのに対して、淮北の農民は、自分たちでもちあわや胡麻、砂糖で作った「土元宵」（田舎の元宵）を食べる。この日の夕食では、村人は「土元宵」のほかに「面灯」も食べる。子供たちの遊んだ「面灯」、供え物として使った「面灯」は特においしいといわれる。なぜかとい

うと、綿油を燃やしたあとの「面灯」は黄色く焦げて、綿油の香と小麦粉の香からさらに妙なる香りを作り出すからである。

旧暦の七月十五日は、豊作を祈願するためにお天道さまに供え物をする行事を行なう日である。主婦は、家の庭の中にテーブルを用意して、そこに小麦や「饅頭」、「花巻」、果物などをおく。

小麦や麺類食品は年中行事のほかに、人生の通過儀礼においても、大きな役割を果たしている。たとえば、淮北では、初めての子供が生まれてから一ヵ月が経つと、「送祝米」という儀式を行ない、子供の誕生を盛大に祝う。子供の母親の実家およびその父系親族たち、子供の祖母の実家、子供の父方の父系親族集団から婚出した女性たちなどが子供の父親の実家に贈り物をするのである。儀式の名は、「送祝米」となっているが、実際にはここでは米がとれないので、小麦、卵、砂糖、布などが贈り物とされる。[写真4]に出ているものは、すべて子供の母親の実家及びその父系親族からの贈り物である。柳の枝で編んだかごは一つの家族を代表する。その中には一様に小麦や砂糖、卵が入れてある。写真右上の赤色の籠は、母親の実家からの贈り物である。すべての贈り物の中でもっとも量が多くてしかも豪華だとされる。赤色の籠は直径およそ一メートルあり、四層からなっていて、それぞれに砂糖や卵、小麦、子供服が入れてある。そのほかに玩具や子供用の車、ベッドも贈られる。

写真4　初めての子供の誕生を祝う「送祝米」という儀式。贈り物に小麦が使われる（1991年）

子供が生まれてから、数ヵ月が経つと、種痘をする。種痘をした子供が無事かどうか、母親の兄弟姉妹や父親の姉妹が見舞いにくる。淮北ではこれを「瞧花」という。「瞧花」の人は通常、大量の「饅頭」や「烙饃」などを持って来て子供の親に贈る。とくに「烙饃」は、焼いた薄いパイなので、種痘の跡が化膿しないで早く「烙饃」のように固まるようにという気持ちがこめられている。したがって、「瞧花」のときは「饅頭」より「烙饃」を多く贈り、一家から五、六〇枚も贈るのである。

淮北は、昔からことわざや「歇后語」、民謡などの口頭伝承が非常に発達した地域である。「歇后語」とは、しゃれ言葉の一種で、いいたい事や物を直接言わずに他の言葉で暗示するものである。これらの口頭伝承にも、小麦と麺

類食品がよく出てくる。たとえば、

「鍋不熱、餅不靠」

鍋が熱くならなければ、パイはそれにつかない。→必須条件がそろわなければ、物事を成し遂げることは無理である。

「包子好吃不在摺上」

餡入り「饅頭」のおいしさはそのひだからでたのではない。→物事の本質を見る場合、表ではなくその中を見るべきである。

「麦怕胎里旱、人怕老来窮」

成長期の小麦にとって水不足が恐ろしいことであるように、年をとった人間にとっては、貧困であることが一番恐ろしいことである。

「人家碗里的饅頭大」

他人の食碗の「饅頭」は大きい。→人の飯は白い。

「回炉的焼餅不香」

焼きなおしたパイはおいしくない。→やり直しはきかない。

「吃人家嚼過的饃不香」

他人がかじったあとの饅頭はおいしくない。→真似事には面白味がない。

「出了籠的饅頭——慢慢涼起来了」

蒸籠から下ろされた饅頭——だんだんと冷たくなってくる。

「隔夜的焼餅——又回潮了」

一晩過ぎたパイ——湿気た。「湿気た」の中国語の発音は「蘇る」の中国語の発音と同じである。したがって、この「歇后語」の本当の意味は、消えた古い事柄や慣習が再び出現することを意味する。文化大革命の十年間、「回潮」はよく使われていた。

「麦糠里搾油——収益小」

麦糠から搾油する——利益が少ない。

「打出来的媳婦、撅出来的面」

うどん粉は力を入れてこねばこねるほど美味しくなるように、嫁は殴れば殴るほど一人前の嫁になり、手を加えないと成長しない。解放前のことわざで、当時の婚家における嫁の修行の厳しさを物語っている。[15]

以上のように、小麦は長い間、淮北地域の食生活の中で主役として活躍し、年中行事や人生の通過儀礼を支えるだけではなく、民衆の口頭伝承と彼らの精神世界においても重要な素材となっている。

淮北の民衆生活における小麦の意味合いはこれからどう変わっていくのか？　現在、都市化・市場経済の波は伝統的な衣・食生活に変化をもたらしている。淮北の都市部で

は住民の米消費が以前より増えている。また、他の地域と同じように、四川料理、広東料理、北京料理などがあふれ、地元のレストランの主なメニューとなって人気を集めている。食生活の均質化が見られる一方で、さらに地元の特色を求めるローカライゼーションも見られる。たとえば、「油酥餅」や「葱油餅」などのような、これまで家庭料理であったものが、現在、地元のレストランのメニューにもの ぼっている。淮北の固鎮県湖溝鎮の鎮長とそこの幹部たちは、「油酥餅」のような地元の麺類食品を他の地域へ販売することを考えている。目下、「油酥餅」を包装するための真空パック技術がまだ不十分であるが、「真空パックの問題が解決できたら、われわれの特産の麺類をスーパーなどに出荷して遠方でも販売することが可能となる」と、幹部たちは淮北の麺類食品に対する開発意欲をみせた。

## 結び

淮北地域における人類学のフィールドワークで出会った「衣・食」民俗を通して、民俗の面白さと奥深さをもう一度認識させられた。

まず、ある人間集団の生活様式の全体である文化に対して、民俗はその集団の生活様式の一部であり、しかも他の集団と比べて独自性を持つ一部である。淮北地域でみた「毛窩子」と豊富な麺類食品は、同じ漢民族の他の地域ではあまり見られないものなので、したがって、淮北の民俗といえるのである。

民俗は、地元の人々が長い間環境に適応してきた結果であり、彼らの知恵の結晶であり、彼らの歴史を語り、彼らのアイデンティティを構成するものでもある。

民俗は、歴史の化石ではなく、時代に適応して常に変化するものである。民俗は集合的で、意識されない性格を有するものというより、つねに人間に意識され、操作されているものであるといったほうが妥当だと思う。オランダにおける木の靴の商品化・観光化、淮北平原の固鎮県湖溝鎮における伝統的麺類食品の開発は、民俗を操作する人々の能動性をよく物語っている。

実はオランダにおける木の靴の商品化・観光化、淮北平原の面類食品の商品化と、私の調査のメインテーマである宗族・贈答儀礼などの伝統的社会組織と文化の復活との間には共通点が見られる。それは伝統文化に対する人間の操作、人間の能動性である。

フィールドワークを通して、私は社会主義集団化と数多くの革命運動が、宗族をめぐる諸制度を封建制度として否定したにもかかわらず、伝統的社会組織と文化の中核となる部分を消滅できなかったために、革命下の中国と伝統社会の間にはっきりした連続性が存在していることに気づい

た。特に人民公社が解散し、政府のコントロールが弱くなってからは、農民たちは「族譜」[16]を作りなおしたり、祖先のお墓の石碑を経てなおしたりして、大規模な祖先祭祀を行ない、それによって父系血縁関係者同士のつながりを強化している。一方、年中行事や通過儀礼における姻戚同士の贈答儀礼も従来より盛んに行なわれるようになった。

ここで重要なのは、宗族や姻戚の間の贈答儀礼は伝統的な集団、伝統的な慣習だから、農民たちが無条件にそれらを守ろうとしてきたのではないという点である。むしろ宗族や姻戚の間のネットワークは、労働援助、資金調達、就学、就職、ビジネス及び村落権力闘争などの面でよく機能していて、農民たちにとって安全な生活を保障できる制度の一つであり、経済発展の装置として利用価値があるがゆえに再興されているのである。[17]

要するに、社会主義国家の枠組みの中にいる農民たちは、いつも中央政府に服従する受け身的存在ではなく、主体性を持ち、常に伝統的社会構造と伝統的文化に知恵を求め新しい環境に柔軟に対応している。現在の宗族と伝統儀礼の復活は、農民たちの新しい環境における選択と戦略といえよう。

今の世の中は、人・情報・金の流動が激しいため、衣・食・住のグローバル化が進んでいる。文化はすでに共同体や民族、国の境界を越えて享受されている。淮北の人も、今はコカコーラを飲み、ナイキのスニーカーを履き、「北国の春」を歌い、「タイタニック」を見て感動する。グローバライゼーションが進み、伝統的「衣・食」民俗を風化させる一方、地方色を求め、民俗を強めるローカライゼーションも同時に進行している。たとえば、民俗は家庭料理の商品化や観光などのコンテクストの中で再構築される。「グローバライゼーションは地域の問題を排除しないばかりか、地域性はむしろグローバル化の過程で立ち上がっていく問題としてとらえることができる」[18]。

したがって、民俗を静態ではなく、動態の中で、現代の人々の生活や経済活動と結びつけてとらえる必要がある。民俗学の中ではすでにこのような動きが出ている。たとえば、中国では「民俗学はただ歴史を説明する学問ではなく、現代社会のなかでも、何らかの役割を果たすべきだという実用学への動きも目立っている……（中略）……経済改革に応じて商品経済の中に民俗心理や民俗審美観の実用機能を持つ必要性を論ずる文章が多く現れた」[19]。また、「アメリカにおいては、モダン・フォークロアが都市民俗学の領域を含めて発達している。民俗は過去のものではなく、現代社会の反映であるという視点が定立した」[20]。

日本においても、ムラ偏重の方向に対して、マチ場の民俗を再発見する気運が強まってきた。従来なるべく調査研究を避けようとしてきた、都市民俗がクローズアップされ

てきたのである。[21]

人類学もこれまで十分な注意を払わなかった民俗にもっと注意を注ぐべきである。つまり民俗をダイナミックにとらえ、時代による民俗の変化、民俗と他の物質生活・精神生活とのかかわり、民俗を操作する主体である人間側の動機とアイデンティティをみることである。民俗を歴史の文脈だけではなく、現代の社会・文化・政治・経済などのコンテキストの中に、都市化・情報化過程の中に入れて考えるべきである。民俗はこれからの人類学にとって文化の変化と持続を解明する大きな手がかりとなり、人類学の重要な課題の一つとなろう。

## 注

〈1〉 中国では「里」は距離の単位である。一里は五〇〇メートルにあたる。

〈2〉 宮田登「民俗学」石川栄吉・梅棹忠生・大林太良ら編『文化人類学辞典』弘文堂、一九八七年、七五四頁。

〈3〉 烏丙安『中国民俗学』遼寧大学出版社、一九八五年、四頁。

〈4〉 何彬「中国本土における民俗学の現状」『文化人類学』八、アカデミア出版会、一九九〇年、一七八頁。

〈5〉 人類学という表現には、ドイツ・オーストリアの狭義の用法と英米流の広義の用法の二つがある。狭義の用法は自然（形質）人類学のみを指すが、広義の人類学は、人間についての総合的研究として、自然（体質）人類学、考古学と文化人類学（イギリスの場合）、あるいは社会人類学（アメリカの場合）からなっている。ドイツ、オーストリアではアメリカの文化人類学に相当する言葉として民族学がある。本論文に出ている人類学は文化人類学の略称として使用している。

〈6〉 フィールドワークは、野外調査、あるいは現地調査とも翻訳されており、人類学の基本的研究方法である。これはもともと人類学の用語であったが、現在一般用語として、広く民俗学やマスコミなどの分野でも使われている。本格的なフィールドワークの方法は、社会人類学の父とよばれるポーランド出身のマリノフスキー（B. Malinowski）によって始められたものである。マリノフスキー以前にも民族学の調査は行なわれていたが、彼によってフィールドワークの水準が飛躍的に高まった。

マリノフスキーは、第一次世界大戦中、メラネシアのニューギニア東部のトロブリアンド諸島における調査で、参与観察の方法を用いて、つまり、調査対象となっている社会の中で暮らし、人々の社会生活に関するデータを、地元の人々と自然な交際を行なう過程の中で収集していた。以後、人類学では、こうした長期間（少なくとも一年から二年）にわたる参与観察法が民族資料収集に不可欠のものと考えられるようになったのである。参与観察を十分に行なうには、一年から二年間の現地調査が必要であると考えた

のは、まず人々の生活の全体のリズムを知るためには、少なくとも一年のサイクルを必要とするからである。また、非調査者がフィールドワーカーを自然に受け入れるようになるまでにも時間がかかる。さらに外国で調査を行なう場合、調査対象である社会の言語をマスターして、それを現地で自由に使えるようになるまで相当な期間が必要である。

〈7〉 Robert H., *Winthrop Dictionary of Concepts in Cultural Anthropology*, Greenwood, 1991, p. 126.

〈8〉 宗族は lineage のことで、中国においては共通の祖先を持つ父系血縁集団であり、外婚単位である。同じ宗族の人々は冠婚葬祭ごとに共同で祖先を祭り、血縁集団としてのアイデンティティを確かめ合う。

〈9〉 蕭県地方志編纂委員会『蕭県志』中国人民大学出版社、一九八九年、一頁。

〈10〉 単一宗族村は、安徽省北部だけではなく、華中や東南部においてもよく見られる。M・フリードマン著『東南中国の宗族組織』(弘文堂、一九九一年)を参照。

〈11〉 蕭県地方志編纂委員会、前掲書、五四五頁。

〈12〉 徐金星「烙饃」『拂暁報』一九八八年四月十四日。

〈13〉 葉大兵・烏丙安『中国風俗辞典』上海辞書出版社、一九九〇年、一六頁。

〈14〉 韓敏「現代中国の農村社会における贈答儀礼」『日中文化研究』二、勉誠社、一九九一年、一二七頁。

〈15〉 以上のことわざと歇后語については、王華朗・杜明達・張英和等編集『蕭県民間文学集成』(蕭県民間文学集成弁公室出版、一九八九年)を参照。

〈16〉 「族譜」は宗族の発生・発展の歴史、祖先たちの墓、創始者から現在のメンバーまでの関係などを記録するものである。

〈17〉 韓敏「宗族の再興」曽士才・西澤治彦・瀬川昌久編集『アジア読本　中国』、一九九五年、八四頁。

〈18〉 山下晋司「観光する人々、観光が作り出す文化」青木保ら編『岩波講座　文化人類学　第七巻　移動の民族誌』岩波書店、一九九六年、二四頁。

〈19〉 何彬、前掲論文、一八二頁。

〈20〉 宮田登、前掲論文、七五四頁。

〈21〉 宮田登「民俗研究の課題」福田アジオ・宮田登編『日本民俗学概論』吉川弘文堂、一九八三年、二七二―二七三頁。

※文中の写真はすべて、安徽省蕭県馬井区李家楼村にて筆者が撮影したものである。